

第2 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 英語以外の外国語については、大学入試センター試験の枠組みを受け継いだ『筆記』テストを課し、「リスニング」テストは実施しない。
- 教科としての外国語科の目標である「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」に基づき問題作成を行う。
また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 問題作成に当たっては、CEFR等を踏まえた力を問うことをねらいとして作成する。
その際、大学教育の基礎力を踏まえ、また、高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることを考慮し、問題作成を行う。

2 各問題の出題意図と解答結果

ここでは各問題を出題した意図及び解答結果についての見解を述べておく。

第1問は発音及び文法・語彙・表現に関する問題である。全体の難易度及び識別力はほぼ妥当であった。

Aは発音変化に関する問題である。問1は激音化とn挿入を問う問題であり、問2はㄷと表記された終声か初声化したときの発音と、漢字語における不規則な濃音化を問う問題である。問1は正答率が比較的高かったが、問2は正答率が低かった。

Bは語彙・文法・表現に関する問題である。語彙に関する問題は、単にある語彙を知っているか否かを試すのではなく、具体的な文脈においてある単語が他の単語とどのように共起し、いかなる意味を実現するかという点に留意しつつ出題をした。文法に関する問題は、偏りがないように配慮しつつ語尾や助詞の用法を問うものを出题した。表現に関する問題は、単語や句・節単位での類義表現を問うものや、一対一の直訳でない韓国語としての自然な表現を問うことに重きを置いた。全体的に、日本語母語話者にとり、学習の要点となる事項に重きを置いた出題となるよう心掛けた。これらのうち、問4と問6は正答率が比較的高かったのに対し、問5は正答率が低かった。

Cは類義表現に関する問題で、一つの表現を他の表現に置き換えることができるかどうかを問うた。単語や句・節単位での類義表現を問うものや、韓国語としての自然な表現を問うことに重きを置き、全体的に、日本語母語話者にとって、学習の要点となる事項に重きを置いた出題となるよう心掛けた。概して正答率が高かった。

第2問は、日常生活でよく使われる表現を素材にして、文脈に沿って対話を完成させる問題と、対話の内容を理解し状況を把握する問題を作成した。全体的に使われている単語自体は難しくないが、状況を正しく把握する能力が要求される。

Aは親しい間柄（大学生同士）での会話について、全体の流れや内容を理解しているかを問う問題が中心である。おおむね正答率は比較的高かった。

問1は、空欄補充問題で、過去に最も多く出題された形式であり、受験者にはなじみのあるものであった。正答率は高かった。

問2は、別の表現への言い換えの可否を問う問題であった。過去にはあまり見られなかった形式ではあるが、さほど難しくはなく、正答率は高かった。

問3も、空欄補充問題で、過去に最も多く出題された形式であり、受験者にはなじみのあるものであった。正答率は第2問Aの中で最も低かった。文脈の理解が不足していた受験者が多かったものと思われる。

問4も、空欄補充問題で、過去に最も多く出題された形式であり、受験者にはなじみのあるものであった。正答率はやはり高かった。

問5は、会話文の内容と一致する文を選ぶ問題で、過去にも多く出題された形式であった。正答率は問3について低かった。会話の参加者と発言内容を明確に区別するのが難しかったものと推測される。

Bは留学生を対象とした韓国語の授業の一場面におけるやり取りについて、話の流れや内容を理解しているかを問う問題が中心である。こちらも正答率は問1以外高かった。

問1は、空欄補充問題であるが、多様な語尾の組合せを問うという、過去にあまりない形式であった。第2問の中で最も正答率が低かった。

問2も、空欄補充問題で、多様な文末表現を知っていれば難しくなかった。正答率は比較的高かった。

問3も、空欄補充問題で、多様な副詞や接続表現を知っていれば難しくなかった。正答率は高かった。

問4も、空欄補充問題で、文脈を理解していれば難しくなかった。第2問の中で最も正答率が高かった。

問5は、会話文の内容と一致する文を選ぶ問題であった。正答率は比較的高かった。会話文Aよりも会話文Bの方が長い上に登場人物も多く複雑であるが、受験者にとって、内容は理解しやすかったようである。

第3問は、グラフや案内図、説明書など、日常生活で目にし得る素材を読み、その内容理解を問う問題である。読解力や情報収集力を駆使しながら、多様な資料に対して柔軟に対応できるか、といった点が肝要である。昨年度に引き続き、共通テストに相応しいかたちにするため、問題作成に際して検討を重ねてきたが、難易度のバランスを含め、適切な出題であったと考えている。

A グラフや案内図に書かれてあることを正確に把握し、韓国語で書かれた選択肢から最も適当なものを選ぶ内容一致問題である。

問1は、月別の平均気温を示すグラフを見て、それに関する説明を正確に読み取る問題である。正答率は高かった。

問2は、商店街の案内図を見て、その内容を正確に把握する問題である。資料にある文自体は長くないため、書かれている語彙が理解できればさほど難しい問題ではない。正答率は比較的高かった。

B デスクの組み立て説明書に関する問題である。説明書の内容を正確に把握する力が要求される問題である。

問1は、2箇所の空欄に入る語の組合せを問う問題である。選択肢の語はそれぞれ類似した形態を有するが、これらの正確な意味を把握したうえで文中に当てはめられるかが問題を解く鍵であったと言えよう。正答率はやや低かった。

問2は、デスクの完成図を問うもので、本文全体の流れとその内容から正解を導き出す問題である。正答率はやや低かった。

問3は、本文の内容を正確に把握できているかを問う内容一致問題である。説明書に書かれている単語は一見すると難度が高く感じられるかもしれないが、イラスト付きのものもある

- るため、全体的にはさほど難度は高くはないが、正答率はやや伸び悩んだ。
- C インターネットサイトに掲載された飲食店の情報ページが素材となっている問題である。問1は、空欄補充問題である。前の文を正確に読み取れていれば自ずと正しい選択肢が導き出される。正答率は比較的高かった。
- 問2も同じく空欄補充問題である。本文全体を把握することはもちろんであるが、選択肢の文と照らし合わせつつ、本文中の関連する小さな記述を見逃さずに捨てるかといった点も正解を左右する問題であった。第3問の中では最も正答率が低く、難度の高さが窺われるものとなった。
- 問3は、内容一致問題である。本文の内容を正確に理解していれば容易に解ける問題であるが、選択肢がすべて日本語であるという点も難度を下げることに繋がっていると考えられる。高い正答率であった。
- 第4問は、習慣について、無意識や習慣改善に関する調査結果などを引用しながら書かれているエッセイを読み、その内容を理解する長文問題である。馴染みのあるテーマであるが、各段落の主張を正確に読み取り、内容に当てはまることわざや四字熟語、具体例、文のつながりなど多様なタイプの問題に答える必要がある。得点率は第1問と同程度だった。
- 問1 ハングル表記された漢字語の漢字表記を問う問題。昨年度から新たに設置されたタイプの問題である。2問あるが、正答率にはややばらつきがあり、「洗手」の「洗」に比べ、「期待」の「期」を問う問題の正答率が低かった。
- 問2 文脈を理解し、適切なことわざを入れる問題である。正答率は高かった。
- 問3 動詞の意味を問う問題。本文で用いられた意味と最も近いものは「組む」を意味する②である。正答率は比較的高かった。
- 問4 前後の内容から判断し、四字熟語の副詞表現を入れる問題。やや難易度の高い問題だったものと思われる。
- 問5 本文で説明している「計画」の具体例を当てる問題。正答率は高い方だった。
- 問6 続く内容から判断し、段落を導入する文として適当なものを選ぶ問題である。習慣を変えるため「完全な成功を動機とすると諦めやすく、今日も頑張ったという自己肯定感を褒美とすべき」と続くので「行為自体から褒美を見つけるべき」の③が正答である。低い正答率となっている。
- 問7 指示表現が指す内容を問う問題。下線部の指示表現は先行の「完全な成功」を指し、その他の選択肢は先行文脈のいろいろな表現に言及しているものの、正答率は比較的高かった。
- 問8 習慣改善に関する本文の、特に後半の内容を理解した上で、その趣旨に合う具体的な行動を選択する問題。正答率は低かった。
- 問9 本文の構成を把握し、文を適当な場所に配置する問題。正答率は第4問では最も高かった。
- 問10 全体の内容と一致するものを選択する問題。文章全体の内容を把握していることが求められる。①と④の二つを選ぶ必要があるが、正答率は第4問で最も低かった。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

共通テストも2年目となり、より実践的なコミュニケーション能力を重視した問題するために、漢字の読みを単独で問う問題をなくし、短文を提示した文法問題を減らして、その代わりに新しい形式としての実用問題を新設し、長文の中に漢字の問題や文法問題を組み込むなどの工夫を行った。第1問に関しては相変わらず発音や文法、語法の知識のみを問う問題であり、読解問題の中で語

彙力・文法力を問うべきであるという批判があった。だが、学習者にとって必要な文法知識を問うこともまた必要で、短文の中でそれを問うことにも意味がある。それらを会話文や長文においてのみ問うことには限界があり、逆に会話や長文の題材選びや問題作成に困難をきたすことが考えられる。よって、今後も発音や文法問題はなるべく文章の中に組み込む努力は続けるものの、第1問のような形式の問題は存続させるべきと思われる。

実用文の出題について、問題の質自体は前年度よりも更に向上した。ただし、実用文は全体的に問題文など、受験者が読まなければならない文章の量が多く、これを今後も減らす努力をしていく予定である。

長文問題は、読解力や思考力を問う論説文のみ1題を出題する体裁を維持した。一つの長文に関する問いの数が増え、分量が多く、難解であるとの意見もあった。題材や分量に関しては、今後も検討していく必要がある。

その他の問題に関しては、おおむね学習範囲内の語彙や文法で適切な問題であるという評価を頂いた。また、高等学校入学以降の学習者にも十分解ける問題であると思われる。今後もより一層良質な問題の作成を目指していきたい。

4 ま と め

共通テスト開始に当たって実用問題を取り入れるなど新たな取組がなされたが、まだ課題はある。実用問題については題材や形式について、様々な可能性がある一方で、大学入試の問題としてどこまで許容されるかという問題もあり、今後も議論すべきだろうし、長文問題をどうしていくか、問題文を短くしたものを幾つか出題して、様々なジャンルの文章を出題できるようにするかも検討課題である。また、問題作成を経るうちにどうしても文章が長くなる傾向があるので、全体の分量に常に留意する必要がある。

使用語彙や文法項目については学習範囲であると評価されたので、今後もこの方針を維持していく。